法霊山霾神社に安置される石の神

石岡　彩華
（地域生活文化課 主事）

八戸市にある法霊山霾神社は水を司る龍神である高霾神を祀り、江戸時代には八戸藩の藩神の地位あった神社で、八戸三社大祭の発祥としても有名である。この神社の本殿には、大小さまざまな丸石や不思議な模様の石が座布団に乗せられた状態で安置されており、ときには本殿の外にも棚に入った状態で置かれていることもある。

宮司によると、これらの石は元々個人の家で祀られていた龍神であるという。祖父母が生前祀っていた龍神を、家族が処分に困って持ってくることが多いそうだ。神様扱いということで、捨てることに心理的抵抗があり、石を砕いて捨てようとすると費用がかかるため、霾神社に持ってくるのである。現在も受け入れのお願いが来るが、置く場所にも限りがあるため、２０２３（令和５）年頃からは新たに受け入れていない。

家で祀られなくなったとはいえ、本殿に安置された龍神はまだ信仰されている。石を触りながら拝む人、賽銭やお神酒を供える人、石の下に敷く座布団を持ってくる人などがいるという。実際、筆者が訪れた際も、一人の年配の男性が石の前に座って、石を両手で包み込むように撫でながら、数分にわたり祈りを捧げていた。

２０２５（令和７）年３月、筆者はほぼ毎日神社に参拝しているという１９５６（昭和３１）年生まれの男性、A氏に話を聞いた。

最初、筆者は龍神について話を聞こうとしていたのだが、A氏は龍神を信仰したり、家で祀っていたりしたことはないとのことだった。A氏によると、本殿に安置されている石を「石神様」として信仰しており、石神様に事の良し悪しや未来に起こることを〝きいている〟のだという。

石神様に〝きく〟方法は、まず自分の住所、名前を唱え、石を持ち上げて石の本来の重さを感じる。次に「〈良いこと〉（または〈悪いこと〉）だったら軽く」と念じて、石を持ち上げる。そして、「〈悪いこと〉（または〈良いこと〉）だったら重く」と念じて、もう一度石を持ち上げる。

２回持ち上げた時に石の重さをどのように感じたかによって、念じたことの結果がわかる。軽く感じる時は易々と持ち上げることができるが、重く感じる時は全く持ち上げることができないのだという。

A氏によると、このように石神様に〝きく〟方法は母親から教わったそうだ。A氏の母親は岩手県の生まれで、よく岡谷稲荷神社（岩手県洋野町）に参拝して、境内にある大きい丸石で上記の方法で石に〝きいていた〟。A氏は母親と一緒に参拝した際、この方法を知り、自身も実践するようになったそうだ。余談ではあるが、A氏の母親は不思議なものが見える人で、A氏自身も何度も不思議な体験をしているという。

霾神社に安置されている石は、元は個人の家で信仰されていた龍神だった。一度は手放されて神社に安置されたが、地域の人たちよって再度信仰の対象となり、別の神としても信仰されているわけである。「捨てる神あれば拾う神あり」ならぬ、「捨てる人あれば拾う人あり」といえる。

法霊山霾神社本殿に安置された龍神とされる石＝2025(令和7)年3月22日・筆者撮影